

# 感覚に対する「指示」

重 田 謙

はじめに

私たちは、感覚に関する語句、例えば「膝の痛み」「背中のかゆみ」「足の裏のくすぐったさ」といった語句によつて、それを感じている人のなんらかの感覚を指示している、とごく自然に想定していると思われる。また、それらの感覚を因果連鎖の鎖のひとつとみなしているようにも思われる。ある人が歩いていて自転車で衝突し、腰を押し、痛みを感じ、また、自転車の前輪が地面を滑り、自転車が倒れ、顔が地面に打ちあたり、顔が腫れ、という出来事があったら、この出来事が原因で、特定の部位に痛みが生じ、痛みの生起という出来事が原因で、腰を押し、顔を打ちあたりといった身体の運動が惹き起こされる、というわけである。しかし、G・ピッチャーの解釈<sup>(1)</sup>によれば、『探究』においてウイトゲンシュタインは、「歯痛」「痛み」といった語が、人が経験する感覚の名前であること及びそれを指示することを否定するのである。もしその主張が正しければ、感覚をひとつの項として含む因果連鎖は、外的な対象の間に成立する因果連鎖と同じ意味における因果連鎖とみなすことはできなくなるであらう。

本稿ではまず第一節において、ピッチャーが解釈するところのワイトゲンシュタインの見解を、特に感覚語は感覚の名前でもなく感覚を指示することもないという主張の論拠に焦点を絞って検討する。第二節ではそれに対して感覚語の感覚に対する指示を許容する議論を提示し、それが『探究』解釈としてもまた議論自体としてもピッチャーの議論より説得力があることを示す。そして最後に、クリプキの解釈によるワイトゲンシュタインの「他人の心に関する懐疑論」に基づいて、第二節で提示された議論にもかかわらず感覚に対する指示が成立しないことを示したいと思う。

### 一 言語的行動主義者の主張

ピッチャーによれば、ワイトゲンシュタインはデカルト主義的理論を支える次の三つの命題を批判する<sup>(2)</sup>（この三つの命題をピッチャーにならって「V」と総称することにする）。

- ①：「歯痛」「痛み」のような語は、瑣末ではない意味において in non-trivial sense 人々がときとして経験する感覚の名前である<sup>(3)</sup>
- ②：私が誠実に truly 「私は歯痛をもつ」I have toothache」あるいは「私は痛い」I am in pain」と言うとき、私は私の意識の状態を記述している
- ③：私が他の人について「彼は歯痛をもつ」あるいは「彼は痛い」と言うとき、私が歯痛をもつあるいは私が痛いときに私がつつと同じ種類の感覚を彼が経験していると主張している

本論との関係においてさらに重要なのは、Vの系としての次のような見解をもまたワイトゲンシュタインが否定しているという指摘である。

V:「痛み」という語は痛んでいる人が感じているぎよつとするような何か something frightful を、公共的に観察可能なものための語がそれらを名指す name あるいは指示する designate 仕方とたとえかなり隔たっているにしても even remotely 似た仕方でも名指すあるいは指示する<sup>(4)</sup>

このVの否定が『探究』解釈として、さらに議論そのものとして妥当であるか否かが、本論における主要な論点となる。その点の詳細な論議は後論に譲ることにして、ここでは、ピッチャーが解釈するところのワイトゲンシュタインの議論をいまし追うことにしよう。

まず、ワイトゲンシュタインが先のVを否定するのはどのような根拠に基づいてであろうか。ピッチャーによれば、もしVが真であるとすれば、誰も他の人が痛みを感じているかいなかを知ることができないというデカルト主義の不合理な主張が帰結するからである。V<sup>(5)</sup>①、②によれば、私は自分の心の中で生起する特定の感覚に注意を向けることによってその感覚に対応する名前の直示的な定義を与え、以降それと同じ種類の感覚が生起したらそれを同じ名前によって記述することが可能になる。そしてさらにV③を前提すれば、私以外の他人については外的な振舞の類似性などを通じて、自分と同じ種類の感覚を感じていることを推測することは可能であるが、自分自身の感覚の生起について知るようには、他人の感覚の生起について知ることはできない、という結論が導かれるのである。自分が痛みを感じるとき私はそのことを知っているが、他の人が痛みを感じていることを私は信じていることとできない (PJ §303) というこの描像を「デカルト主義的描像」と呼ぶことにしよう。

ピッチャーは以上のような仕方でもVの否定を導くのであるが、本論の関心は基本的にV①及びVの否定にあるのである。それらのテーゼの否定を直接根拠づけるように思われる『探究』の議論をここで検討しておきたいと思う。そ

れは有名な「箱の中のカブトムシ」の比喩を用いた第二九三節の叙述である。

「全ての人が、その中に何かがある箱をもっており、その何かが『甲虫』と呼ばれていると想定しよう。誰も、ほかの人の箱の中を見ることができず、そして全ての人が、自分は自分の甲虫を見ることよつてのみ、甲虫がなんであるかを知ると言う——この場合各人がその箱の中に別のものをもっているということもありうるだろう。そのようなものが絶え間なく変化していると想像することさえできるだろう。——しかしこの人々の『甲虫』という語がひとつの使用をもつとしたらどうか」。

ここで述べられている内容を敷衍してみよう。われわれは、共通の特徴をもつ特定の振舞い（うめき、叫び、顔をしかめる＝「箱」）を通じて、それに伴う感覚（痛み＝「箱の中の対象」）を「表示する」語（「痛み」＝「甲虫」）の使用を学ぶ。そしてそのように習得された感覚語、例えば「痛み」は、それが帰属される人に対して他人は同情したり、医者がそれを緩和しようとしたり（PU §403）という「ひとつの使用」をもっている。さてそこで、各人はそれぞれ一貫して同じ種類の感覚に対して「痛み」という語を用いているが、それぞれが感じている感覚の性質は全く異なっていると想定しよう（各人が箱の中に、甲虫や石や石鹼等をもっている……）。しかし、それら異なった感覚は、共通の特徴をもつた表出（うめき、叫び等）をもっているのであるから、「痛み」という語の公共的な使用は一切変化しないのである。さらに、ある個人が「痛み」という語に対応する感覚を記憶に保持することができず、その都度変化している感覚を常に同じ感覚だと信じて「痛み」という語を使用していると想定しよう（PU §271）。しかし、その表出が一貫して共通の特徴をもっている限りやはり「痛み」という語の公共的な使用は一切変化しないのである。

しかし、公共的・外的な対象の場合、事情は全く異なる。複数の対象の種類の異同に依じて、あるいは、同一の

対象が変化するかしないかに応じて、同じ名前が使用されたり、異なった名前が使用されなければならない。そして異なった名前、例えば「椅子」と「本」はそれぞれ非常に異なった使用をもっているのである。かくして、第二九三節では次のように結論づけられる。

「感覚に関する表現の文法を、『対象と表示 *Bezeichnung*』のモデルにしたがって構成する場合、対象は不適切なものとして考察から抜け落ちるのである」。

ここで「考察から抜け落ちる」とされている対象とは感覚を意味している。そして感覚が考察から抜け落ちるわけであるから、V①及びVは明らかに否定されることになるのである。

その一方で、ワイトゲンシュタインの立場は、感覚を振舞や振舞の傾向性に還元しようとする行動主義者とは明確に区別される。例えばワイトゲンシュタインは、痛みを伴なう痛みの振舞と痛みを伴わない痛みの振舞との相違ほど大きな相違はない、と述べている (PU §304)。ワイトゲンシュタインは「ある人が痛みを感じているとき、彼は非常にしばしば、そしておそらくいつも (痛みの振舞に伴なう) ギョツとするような何かを感じている」ということを認めているのである。そうした私的で内的な出来事(6)の存在を前提したうえで、ピッチャーの解釈するワイトゲンシュタインは次のように主張する。

「私たちが、『痛み』という語とともに営む数多くの言語ゲームにおいて、私的な感覚はいかなる役割も演じない。それゆえ、例えば『木』がその種類の対象を表示する *denote* 仕方と少しでも似た仕方で、『痛み』は私的な感覚を表示することはできない。痛みの言語ゲームにおいて役割を果たすのは痛みの振舞い (中略) と痛みを慰める振舞い、手短に言うならば『痛み』という語が使用される外的な状況である」(7)。

つまり、ピッチャーの解釈するワイトゲンシュタインは、一方で感覚の存在を認めつつ、他方ではいかなる言語に

も、そのような感覚に対する名前は存在しないしまた存在することもできない、と主張するのである。そして、私たちがそれに対して、決して名前ではない語をもつところの感覚とは、感覚をもつ人々の振舞と彼らに対する他の人々の振舞に関わることからはかならないのである。A・ドナギャンは、ピッチャーが解釈する以上のようなウイトゲンシュタインの立場を、通常の行動主義者と区別して、「言語的行動主義者」と名付けている。<sup>(8)</sup>

## 二 感覚に対する指示を許容する説<sup>(9)</sup>

ピッチャーによる解釈の問題点のひとつは、第二九三節の結論部分の直前の叙述に見出すことができる。

「その場合、その語<sup>(10)</sup>『甲虫』という語」はあるものの表示ではないだろう。箱の中のもの言語ゲームに属さない。なにかとしてさえ。というのも箱は空っぽでもありうるのだから。——そうではない。箱の中ものは『短絡され gekürzt werden』うるのである。それがなんであれそれは消え去る *sich wegheben* のである」。

この箇所の前半部分は、明らかにウイトゲンシュタイン自身の見解ではなく、彼が批判する想定上の対話者のそれである。問題は、そこで批判されている前半部分の議論こそが、ピッチャーがウイトゲンシュタインに帰属する見解と一致しているように思われるということである。<sup>(11)</sup> 前半部分の主張全体が、「そうではない」という語によって否定されているとするならば、むしろウイトゲンシュタイン自身の見解は次のように述べ直すべきだろう。「感覚語はあるものの表示であり、また感覚は言語ゲームに属している、ただし、感覚は『短絡され』うるのである」と。さらにヒンティカが正当にも指摘しているように、第二九三節の結論部分は「感覚に関する表現の文法を、『対象と表示』のモデルにしたがって構成する場合、対象は不適切なものとして考察から抜け落ちる」となっており、それ

が条件法で述べられている点を見落としてはならないだろう。ヒンテイカの指摘に注意を払うならば、ここでの主張は、次のように解釈することができる。「対象としての感覚が考察から抜け落ちるべきでないならば、感覚に関する表現の文法を『対象と表示』のモデルにしたがって構成するべきではない」。そして、この場合の前件は感覚についてのわれわれのごく自然な見解によって肯定されているのである。

それでは、以上で指摘した解釈と整合的な議論を提示したいと思う。公共的・外的な対象、例えば椅子とそれに対する名前「椅子」との関係には次のような特徴を認めることができる。まず、公共的・外的な対象がもつ諸々の性質、及びその性質に基づいてその対象がわれわれの生活において果たす機能によって、それに対応する語の使用は規定されるということである。「意味＝語の使用」説 (PU §43) を採用するならば、対象の性質とそれに基づく対象の機能がそれに対応する語の意味を規定するのである。一方、公共的・外的対象に対応する語には同じ種類の性質をもつ対象を指示するという機能がある。

感覚の場合には事情は異なっている。先に見た通り感覚そのものの性質によって、感覚に対する語の使用は規定されない。むしろ、感覚の表出とそれがわれわれの生活において果たす機能が感覚語の使用つまりその意味を規定しているのである。また、感覚語は同じ種類の性質をもつ感覚を指示するという機能をもちえない。各人の感覚が全く異なった性質であったとしても、感覚の表出が同一種類でありさえすれば同じ感覚語が用いられるからである。対象と表示のモデルに従うならば、ここでも感覚語は感覚の表出を指示していることになる。つまり「感覚に関する表現の文法を、『対象と表示』のモデルにしたがって構成する場合、対象は不適切なものとして考察から抜け落ちる」というわけである。

たしかに、感覚はその性質によってそれに対応する語の使用・意味を規定することはできない。しかし、そのことから、感覚語が、共通の振舞に伴う感覚——その感覚は各人で、また個人でもつど異なった性質であるかもしれない——を指示しているとみなしてはならない、ということにはならない。ここで、感覚語によるそのような指示——感覚の表出が共通の特徴をもつ限りにおいて、その表出に伴う感覚の性質がどのようなものであれ、同一の感覚語が（感覚の表出ではなく、）感覚そのものを指示する——を「S指示」と呼ぶことにしたいと思う。

感覚が考察から抜け落ちるべきでないならば、対象と表示のモデルにしたがって感覚の文法を構成すべきではないのであり、したがって感覚の文法に固有のS指示という機能を認めるべきなのである。そのとき「感覚語はあるものの表示であり、また感覚は言語ゲームに属している」と言うこともできるのである。ただしS指示によって指示される感覚そのものの性質は感覚語の使用・意味にはいかなる影響も与えないという意味において感覚は言語ゲームにおいて「短絡されうる」のである。

ピッチャーによれば、V①を含むVとその系としてのVが否定されるのは、そこからデカルト主義的描像が帰結するからであった。しかし、仮に感覚語にS指示の機能を認めたとしてもそこからデカルト主義的描像が帰結することはない。というのはその場合でも、感覚語の使用・意味を規定するのはあくまで感覚の表出であり、したがってわれわれは他の人がある感覚をもつことを知ることができるからである。また、感覚語にS指示を認めることは、われわれが第一節でV①とVを否定する論拠として取りあげた「箱の中の甲虫」にまつわる考察とも両立する。したがって、少なくともこれまでの議論においては、感覚語にS指示の機能を認めることに理論上の困難は存在しない。また、先に見た通りたんに「探究」解釈の整合性という観点からしても、感覚語にS指示の機能を認める議論のほ



うがより説得力をもっている。そしてなによりもその場合、感覚語が用いられるときそれはある人が感じているその感覚を指示しているというごく自然な直観が擁護されることになるのである。

以上でピッチャーの解釈する言語的行動主義者の立場よりも、議論上、解釈上より妥当な、感覚に関する見解をひとまず提示することができた。次節では、このような見解が直面することになる困難を示したいと思う。

### 三 感覚の言語ゲームの特異性

その困難を提示するに先だって、まず、感覚を「甲虫」と呼ばれる箱の中の対象」と正確に同じ性質のものであると仮定して、その場合、どのようにして箱の中の対象に対する指示が成立するのかを検討してみよう。いま、私の箱の中に、通常「甲虫」と呼ばれている昆虫が入っているとす。私の箱の中の対象に対する指示は、私自身にとっては外的・公共的な対象に対する指示と同様の仕方で成立していると言える。箱の中の対象は私自身にとつては隠されてはいないのであるから。それでは、私が覗くことができな他の人の箱の中の対象についてはどうであろうか。

仮に、感覚（箱の中の対象）と感覚語（「甲虫」）との関係が「対象と表示」と同様の関係であるとしよう。その場合、一般に信じられているところによれば、私は、自分の箱の中にいる甲虫から、私の箱の中にあるという性質を捨象した甲虫一般の概念を形成することができる。そして、その概念に基づいて「彼の甲虫」つまり彼の箱の中にある甲虫を想像することが可能となるのである。彼の箱の中の対象が、私が形成した甲虫の概念に一致する場合、「彼は甲虫をもっている」という私の言明は真となり、この言明に含まれる「甲虫」という語による彼の箱の中の

対象への指示が成立するわけである。しかしこの場合、前提により私は彼の箱の中の対象を見ることはできない。それゆえ私には、彼は甲虫をもっていると信じておき、<sup>(13)</sup>「甲虫」という語による指示についてもそれを信じておき、<sup>(13)</sup>しかできないのである。ただし、ここで重要なのは少なくとも指示の成立を信じておけるといふ点である。

では次に、感覚と感覚語の関係が前節で見たS指示の関係にあると想定しよう。S指示とは、ある感覚の表出が共通の特徴をもつ限りにおいて、経験されている感覚の性質がどのようなものであれその感覚を指示する、というものであった。ここで重要になるのは感覚の表出であり、それはわれわれの考察における「箱」に対応している。

この場合私は、私のものであるという性質を捨象した箱一般の概念、及び私の箱の中にあるという性質を捨象した甲虫一般の概念を形成する。その概念に基づいて「彼の甲虫」すなわち「彼の箱の中の甲虫」を想像することができる。この場合私は、彼の箱を見ることができるのであるから、私が形成した箱の概念が彼の箱に適用できるかどうかを容易に判断できる。それが適用できる場合、私による「彼は甲虫をもっている」という言明は真となり、「甲虫」という語による彼の箱の中の対象へのS指示が成立する。この場合私が形成した甲虫の概念が彼の箱の中の対象と一致するかいなかは問題にならない。箱の概念が彼の箱に適用できる限りにおいて、私が形成した甲虫の概念に一致したりしなかったりする彼の箱の中の対象が、「甲虫」という語によって指示されるのである。

以上、感覚を「甲虫」と呼ばれる箱の中の対象と正確に同じ性質のものであると仮定して考察を進めてきたが、次にその仮定を外して現実の感覚について検討していこう。まず、われわれが自分自身や他人の振舞の観察に基づいて、「痛みの振舞」という一般的概念を形成できることに疑問の余地はないであろう。ワイトゲンシュタイン自身

も痛みの振舞の像 Bild あるいは範型 Paradigma は言語ゲームに属すと述べている (PU §300)。一方で、クリプキの解釈によれば、ウイトゲンシュタインは自分自身の痛みに基づいて他の人にも適用可能な「痛み」の一般的概念を形成することは不可能だと述べるのである。<sup>(15)</sup> その理由はこうだ。

私が特定の感覚例えば歯痛に注意を集中しその質的特性について観察し、しかるべき抽象をおこなえば、それに基づいてその後を生起する歯痛を再認するために必要な概念を形成することができる。<sup>(16)</sup> それでは、そこで形成された概念から一体何を抽象すれば、他の人にも適用できる「痛み」の一般的概念を得ることができるだろうか。想定される答えは「私を感じる歯痛」という概念から、「私」(あるいは「自己」「私の心」という概念と、それと歯痛との間に成立している「感じる」という概念を抽象すればよい)というものである。しかしそもそも「私」あるいは「感じる」というのはどのような概念なのだろうか。ウイトゲンシュタインはヒュームとともに、われわれはそこで抽象されるべき「私」「感じる」という概念をもっていない、と述べるのである。<sup>(17)</sup>

その主張は帰謬的に論拠づけることができる。仮にわれわれがそこで抽象されるべき「私」とか「感じる」という概念をもっているとすれば、「私を感じる痛み」からそれらを抽象すれば「痛み」という一般的概念を得ることができる。しかし、そもそも誰にも感じられていない「痛み」とは不合理な概念である。したがって、われわれにはそこで抽象されるべき「私」とか「感じる」という概念をもつことは不可能なのである。以上の主張が正しいとするならば、私自身の痛みをモデルにして「彼の痛み」という概念を形成することは不可能である。そのためにはまず、私の痛みから痛みの一般的概念を形成できるのでなければならぬからである。

以上の論点をふまえて、他の人の痛みに対する指示について検討してみよう。私は痛みの振舞の一般的概念をも

っているのだから、他の人の振舞にその概念が適用できるかいなかを判断できる。「甲虫」のモデルによれば、他の人に痛みの振舞を認めることができる場合、彼が感じている感覚が私の痛みの概念に一致しようとしまいと、彼を感じている当の感覚が「痛み」という語によってS指示されるわけである。しかし私は、私の痛みをモデルにして彼の痛みという概念を形成できない以上、彼の感覚という概念もまた形成することができない。したがって、この場合に可能なのは、彼の痛みの振舞の背後にある私の感覚を指示するという想定だけなのである。

では、私自身の感覚以外のものをモデルにして、彼の痛みという概念を形成することはできないのであろうか。私自身の感覚をモデルにしないとすれば、残されるのは私とは独立の存在者、つまり甲虫のような対象をモデルにするほかない。つまり、彼の痛みという概念を彼の甲虫という概念と同質のものだと考えるのである。しかしその想定は、誰にも属さない一般的な甲虫の概念を形成できるのと同じ仕方、誰にも属さない痛みという概念を形成できる、ということを含意する。それが誤りであることは先に指摘した通りである。

これまでの議論を整理しておこう。われわれは自分自身の感覚をモデルにして他人の感覚という概念を形成することができない。一方、自分自身の感覚ではなく、自分とは独立のなんらかの対象をモデルにするならば、他人の感覚という概念は形成できるが、その場合に形成される概念は誤りである。そこからは、自分自身の感覚をモデルにして誰にも属さない感覚という一般的な概念を形成できる、という誤った主張が帰結するからである。

一般に何かをモデルにして形成することが不可能な概念は、その概念によって何かを指示することが不可能だと言えるだろう。というのもその概念にはそれに対応するモデルがそもそも存在しえないのだから。したがって「彼の感覚」という概念によって指示が成立することはありえないのである。<sup>(18)</sup>

第二節で、われわれは感覚に対する指示を維持するためにS指示という装置を案出した。しかし、それが有効に機能するのは感覚を「箱の中の甲虫」と正確に同質のものだと想定する場合のみである。しかし、そのような想定は先に見た通り感覚についての誤った主張を含蓄する。その誤りを回避するには感覚語による感覚の指示という考え方をわれわれは放棄せざるを得ないのである。<sup>(19)</sup>

註

ウィトゲンシュタイン全集からの引用・参照箇所は、本文中において以下の略号及び節番号にて記す。

PU: Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, in Ludwig Wittgenstein *Werkausgabe* Band 1, Suhrkamp, 1984.

- (1) Cf, G. Pitcher, *The Philosophy of Wittgenstein*, Englewood Cliffs, 1964.
- (2) *Ibid.*, p. 285.
- (3) ピッチャーの議論から判断すると、「瑣末ではない意味」における名前とは公共的に観察可能な対象に対する名前と本質的に同じ性質をもっている名前のことを意味していると考えられる。
- (4) Pitcher, p. 298.
- (5) 例えば大人が子供に痛みという語を教える場合、大人は子供が痛みを感じていることを知っているし、知っているならば、その語を子供に教えることはできないのである。
- (6) Pitcher, p. 298.
- (7) *Ibid.*, pp. 298-299.
- (8) Cf, A. Donagan, "Wittgenstein on Sensation", in G. Pitcher ed., *Wittgenstein: The Philosophical Investigations*, Doubleday, 1968, p. 329.

- (9) 上の節で展開される批判は、主として A. Donagan, op. cit., M. Hintikka and J. Hintikka, *Investigating Wittgenstein*, Basil Blackwell, 1986, R. Rorty, "Wittgenstein, Privileged Access and Incommunicability", *American Philosophical Quarterly* Vol. 7, 1970, の議論から多大な示唆を受けている。しかし、議論の内容は彼等のものでせよ、それ微妙に異なっており、誰にもその主張を帰属できる種類のものではない。
- (10) ここで「その語」と訳されているのは、原文では *es* である。文法的には *es* が指示するのは、*einen Gebrauch* と解釈するのが正確だが、文脈から「その語」を指示しているとみなすのが妥当であると判断し、この訳語をあてた。
- (11) Cf., Pitcher, p. 298.
- (12) Cf., M. Hintikka and J. Hintikka, pp. 249-251.
- (13) ここで述べられているモデルは、デカルト主義的描像に正確に対応している。
- (14) Cf., S. A. Kripke, "Post Script: Wittgenstein and Other Mind" in *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard, 1982, pp. 114-45.
- (15) *Ibid.*, pp. 124-5.
- (16) このような通俗的な見解はウィトゲンシュタインが私的言語論によって批判の対象としたものであることは言うまでもない。また、これまで幾度か本文中で繰り返されてきた「概念の形成」についての見解もまた、彼の規則を巡る議論の批判に服するものである。しかし、その点は本節の議論にとっては本質的な問題ではない。というのも、仮にそのような見解を容認したとしても、感覚の場合にはそれ固有の困難が生ずることを示すのがここでの目的であるからである。
- (17) 無論われわれは、「私」とか「感じる」という語を有意義に使用できるという意味においては、その概念をもっている。ここで言われているのは、私の痛みをモデルにして痛みの一般的概念を形成する場合に必要な「私」とか「感じる」という概念をもっていないということなのである。
- (18) ここで、少なくとも「私」の場合には感覚に対する指示は成立するのではないかという疑問が生ずるかもしれない。

い。しかし、そのように考えると例えば次のような困難が生じる。私が感覚語によって自分の感覚を指示している  
としよう。私とそれ以外の人は、私の痛みについて語る場合、同じ痛みについて語っている。一方で私による「私  
の痛み」という語は私の痛みを指示しており、他方で、私以外の他の人による「彼の痛み」という語は私の痛みを  
指示していない。したがって彼らは同じ事柄について語っていないということになり、矛盾が生ずるのである。

(19) われわれが至った結論は、少なくともVの否定については第一節の言語的行動主義者のそれと一致している。し  
かし、そこに至る論証過程が全く異なっている点に留意されたい。言語的行動主義の主張は甲虫の考察を経るだけ  
で足りた。しかし、われわれが至った結論は、甲虫の例を根本的に批判することによって得られたのである。

(大学院後期課程学生)

## SUMMARY

**'Reference' to Sensation**

Ken SHIGETA

We seem to take it for granted that words for sensations refer to the sensations that a certain person experiences. Based on Wittgenstein's discussion on sensations, this thesis aims at rejecting such a common view and proving that reference to sensations is impossible.

G. Pitcher construes Wittgenstein as a highly sophisticated behaviorist — linguistic behaviorist —. According to Pitcher, although he acknowledged that private and inner sensations exist, Wittgenstein asserted that words for sensations such as "toothache" do not refer to them. This claim is the same one as we attempt to demonstrate in this thesis.

However, the proof that Pitcher ascribes to Wittgenstein is insufficient to come to this conclusion, given that it is possible to construct a theory of sensation which enables such words to refer to sensations and is compatible with the argument that Pitcher depends upon in order to show that reference to sensations is impossible. The theory is based on admitting a function peculiar to words for sensations. The function is: so far as the expression or behavior of a sensation is common to those who use the word for the sensation, it refers to the sensation which accompanies the expression or behavior, regardless of the quality of the sensation each person experiences privately. In this thesis, the function is called the "S-reference".

Nevertheless, even if such a function is conferred on words for sensations, they still cannot refer to sensations, due to the fundamental and essential property of sensations. The property is, in short, that a person cannot imagine an other's sensation after the model of his own sensation. It is the solipsistic view that Wittgenstein consistently had held on to since his earliest works.

キーワード 感覚 指示 言語的行動主義 S指示 独我論